



TITLE:

外國文献

AUTHOR(S):

CITATION:

外國文献. 日本外科宝函 1928, 5(6): 1354-1364

ISSUE DATE:

1928-11-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200166>

RIGHT:

痙攣性疾患ニ於ケル扁桃腺切除術

Die Tonsillektomie bei hyperkinetischen Krankheiten.

von Dr. Wichura,

Münchener Medizinische Wochenschrift Nr. 18. 4. Mai.

1928.

著者ハ先ヅ扁桃腺ノ生理的意義及其ノ病的狀態ハ恐ルベキ諸種疾患ノ侵入門戸ナルヲ述べ、特ニ心、腎、關節及ビ末梢神經疾患ト種々因果關係アルヨリ推シ、之ノ又中樞神經系統ノ諸種疾患ノ誘因トシテ看過スベカラザルヲ強調セリ。即チ chorea minor, chorea gravidarum, paralysis agitans, Rosenthal'sche Hyperkinesia idiopathica、及 Epilepsie ノ患者ニ就テ發病狀態及治癒成績等ノ關係ヨリ扁桃腺炎ハ此等疾患ノ誘因トナリ得ルコトヲ論斷シ結語トシテ、

(一)、病的扁桃腺ハ今日マデ考ヘラレタ以上ニ急性及ビ慢性中樞神經系統ノ疾患ニ對シテ主因トシテノ又偶然的ノ意義ヲ有スルモノデアルコト。

(二)、眞ノ又ハ眞ト思ハレル傳染性中樞神經系統疾患ノミナラズ、變性疾患ニ於テハ扁桃腺ノミナラズ、齒牙副腔泌尿生殖系統腹腔等ニ傳染性化膿過程ガ發見セラレルコト。

(三)、例ヘ扁桃腺検査ハ陰性ナリトモ、専門家ノ助ヲカリ確メルコト。

(四)、病的扁桃腺ハ出來ルダケ根本的ニ切除スルコト。(勝呂)

哺乳兒ノ骨折治癒現象

Betrachtungen zur Frakturheilung im Säuglingsalter. von

Ernst Bors.

Zentralblatt für Chirurgie, 1928 Nr. 35. S. 2185

右上膊骨屈曲骨折ヲ受ケタル生後三日ノ女兒ノ治療中、三日或ハ四日又ハ七日目毎ニレントゲン寫眞ヲ撮リテ、其ノ骨折治癒ヲ觀察セシニ、已ニ骨折第三日目ニ輕度ナレ共假骨ノ白影ヲ認メ、第六日目ニ白影著明トナリ、第十七日目ニ最高度ニ達シ、以後假骨ハ漸次吸收、化骨セラレ、三ヶ月一シテ完全ニ原形ニ復セリ。

斯ク假骨形成ノ成人ニ比シテ早期ニ發生スルハ、(一)哺乳兒組織ノ若クシテ其ノ再生力ニ富メルコト、(二)生産的ニ存スル哺乳兒筋緊張過度ガ局所ノ血行ヲ良好ナラシムルタメ、(三)大腦脊髓束ハ哺乳兒ニ於テハ發育不充分ニシテ背髓中樞ハ大腦ノ支配ヲ受クルコト少ク、總テノ反射運動ハ早く且自由ニ傳達セラル、タメ、成人ニ比シヨリ多クノ反射的筋強直ヲ惹起スルコト等ニ起因ス。

尙發生セル假骨ガ改造セラル、ニ際シ、成人ニ於テハ長軸ノ方向ニ營マル、一反シ、哺乳兒ノ夫レハ横軸ニ營マレ、生理的骨發育ニ類似シ疊積添加發育スルヲ見タリキ。(鈴江)

骨折時ノ「カルルス」造成ニ關スル實驗

Experimentelle Beeinflussung der Kallusbildung bei Knochenbrüchen.

von K. Glässer u. J. Hass

Wiener Medizinische Wochenschrift Nr. 20. S. 642

一般ニ骨形成及骨成長ニ際シ、多クノ要素ガ共ニ働キマス。即「カルシウム」鹽、磷酸鹽「グイタミン」、内分泌臓器ノ分泌物デアリマス、特ニ生殖腺及甲状腺ノ影響ニ付テ屢々論議サレテオリマス、是等ノ報告サレタモノ、研究ハ骨折後ニ起ル假骨形成ニ對シ胸腺製劑ノ輸入ガ及シタ影響ト相關連シテオルノデアリマス。Bier氏ハ既ニ一九一三年ニ胸腺ガ骨再生ヲ促進スルトイフ事ヲ云ツテオリマス、Kraus及Tandler, Denzel, Basch 及他ノ權威者ハ胸腺ト骨トノ間ノ關係ニ付テ述ベテオリマス、是有ノ報告ニ付テノ研究ハ藥物學的ニ確メラレマシタ、即チ多價燐素含胸腺「エキス」ガ骨折後ニ猫ニ注射サレマシタ、又胸腺「エキス」ノ外ニ尙ホ甲状腺「エキス」寧丸「エキス」副甲状腺「エキス」及Xovoprotein, ガ試ミラレテヨイ結果ヲ得マシタ、是等ノ平行セル一列ノ試驗ガ好結果ヲモタラシタ如クニ胸腺摘出後ニハ假骨形成ガ著明ニ減少シテオリマス、又胸腺「エキス」ガ治療ヲ促進シタトイフ同様ナ研究ガアリマス、又胸腺切開術ハ假骨形成ノ遅延ヲ來シXovoprotein Testosan Parathyreolitin ハ假骨形成ニハ作用シナイコトガシラレテオリマス。

上皮細胞小體ハ假骨形成ヲ少シク促進シマス、尙復病ノ骨變化ノタメニ截骨術ヲ受ケタ所ノ人間ニ於テ胸腺製劑ガ注射サレテ、ソノ

大部分ハ良結果ヲ得ヨイ假骨形成ヲ保ツテオルトイハレテオル。

Herr F. P. Pick ハスベテ内分泌臓器ハソノ機能ニ於テ一ツノ閉ヂラレタル輪ヲ作ツテオル様ナモノデアルトイツテオル。ソシテKalkspegel ハソノ腺ノ作用ニヨツテ調節サレテオリマス、上皮細胞小體ノ Hormon 〱 Kalkspegel ニ影響スルニハ適切ナモノデハナクテムシロ假骨形成ハソノ影響ニヨリ一層惡クサレマス、コノ際ニC. ガ骨ヨリ奪ヒ去ラレル故ニ「カルシウム」過剰血液ヲ來シ、ソノ症狀トシテ嘔吐、下痢ナドヲ起シマス、亦尙復病治癒ノ Vitamin Vigantol ハ推奨出來ナイモノデアルトイツテオリマス、何故ナラバソレハ確ニ假骨形成ヲ促進スルガ、而シ思ヒモカケヌ所、例ヘバ血管ニ石灰ノ沈着ヲ起サシメマス、ソレ故ニムシロ、ソレラハ有害ナ結果ヲ來ストイツテオリマス。

要スルニ胸腺製劑ヲ使用スルト是ラノ缺點ヲモツテオラナイノデアリマス。

横隔膜神經捻除術後ノ一死亡例

Ueber einen Todesfall nach Phrenicorectomie.

von Dr. Wilhelm Berg.

Deutsche Medizinische Wochenschrift. Nr. 21 25. 5. 1938.

患者ハ骨格強壯營養佳良ナル四十五才ノ女子。生來健全著患ヲ知ラナカツタガ三ヶ月半程前發病シタト云フテ來院シタ。

當時ノ所見デ右側濕性空洞性肺結核ナル診斷ノ下ニ人工氣胸術ヲ施シ、五週間ニワタツテ六回總量六千五百立方糎ノ空氣ヲ何等ノ合併症モナク送入シタ。シカルニ右肺上葉ノ尖端内側ニ癒着ガアツテ

July 28, 1928

空洞ノ壓縮ハ思フ様ニ出來ズ、又下葉ニモ橫隔膜ト廣イ癒着ノアルコトガ分ツタ。コ、ニ於テ、更ニ橫隔膜神經捻除術ヲ企テタノデアル。

手術ハ根本的橫隔膜神經切除術(ゲーツエ氏)ニヨツテホゞ定型的ニ行ハレ、術後ノ經過モ先ヅ尋常デアツタ。

然ルニ術後五時間ノ後患者ハ急ニ呼吸困難、「チアノーゼ」ヲ來シ右胸ノ呼吸運動ハミトメラレナイ様ニナリ、左胸ノミ瘰癧的運動ヲ呈スルニ至ツタ。脈搏ハ緊張良好ナレ共著クソノ頻數ヲ増シ、右側ノ瞳孔ノ全開強直、同側ノ半身發汗ガミトメラレル。シカモ當時ナホ左側ノ瞳孔ハ正常大デ光ニタイスル反射モ迅速デアアル。直チニ酸素吸入、「ロベリン」注射ヲ行ツタガ、呼吸困難ガ起ツテヨリ一時間半ノ後ニ呼吸麻痺ノ下ニ死ノ轉歸ヲ取ツタ。

剖檢ノ結果ハ左股靜脈ニ血栓、左肺下葉ヲ灌流スル動脈ニ新シキ栓塞ガ見出サレタ。ソシテ迷走神經ハ何等傷害ヲウクルコトナク存在シテ居ルコトモ證サレタ。

結局コノ死因ハ右肺ノ人工氣胸ニ加フルニ左肺ニ新シク出來タ栓塞ニ歸スベキモノデアアル。タゞ何故ニ術後五時間後ニ頸部交感神經ノ刺激症狀ガアラハレタカ。コレハ恐ラクハ手術ノ際不注意ニ交感神經節ニ「ハツケン」等ヲカケタコトニヨリ該神經ヲ刺激シタモノデコレガ「ノボカイン」麻酔ノタメニ直チニ興奮狀態ヲ呈スルハ到ラズ麻酔ノ消滅後現レテ來タモノダロウ。(河田)

筋 緊 張

Muscle Tone.

By Lewis J. Pollock

筋緊張ノ適確ナ定義ハマダ無イ。ガアレハ、之ヲ活動體位ト謂ヒ、ヨハンネス、ミユレルハ、正常骨骼筋特有ノ靜止狀態ニ於ケル微細ナ收縮、現象ダト云ツタ。現今デハ、自己感受性反射ダト云フ定義ニ近寄ル様子デアアル。フルトンハ「正常ノ附着點ニ依ツテ伸張サレタル骨骼筋ハ緊張ヲ保ツテ居ル。即チ伸張夫自身ガ筋緊張維持一必要ナ刺激デアアル。」ト云ツテ居ル。

筋緊張ニ關スル吾人ノ智識ハ大部分去腦動物ノ研究カラ得タモノデアアル。去腦動物ハ適當ナ體位ヲ採ラシメレバ起立サシテ置ク事ガ出來ル。事實、去腦硬直體位ハ反重力性體位乃チ起立體位ノ變態デアアル。

シェリントンハ骨骼筋ノ神經支配ハ二個ノ反射系統ニヨリテ成ル事ヲ示シタ。其一ツハ體位ノ根本ヲ成ス所ノ筋肉ノ持續性緊張ヲ維持シ、其ノ性質ハ反射性デアツテ、迷路(ラビリント)頸及ビ軀幹ヨリノ反應ニヨツテ影響ヲ受ケテ體位ノ變化ヲ來タス。此反射系統ハ自己感受性デアツテ其刺激トナルモノハシェリントン、リッデル等ノ證明シタ如ク伸張デアアル。第二ノ系統ハ急速短期ノ運動ニ關與シ其反射弓ハ大體脊髓ニ在ル。此說ハラングラアン、デベエル等ノ二重支配說ニ對スル腦脊髓系統ノ二重機能說デアアル。

去腦硬直ノ根底ハ筋ノ伸張ニヨツテ起ル所ノ筋肉内ノ自己感受性反射作用ニ由ツテ構成サレルト認メラレテ居ルケレ共デエヴィス氏ト著者ハ下ノ如キ事實ヲ觀察シタ。(一)一側前肢ノ後根ヲ切斷スルモ去腦硬直ハ他側ト同様即チ後根切斷ニヨツテ影響サレヌ。(二)迷

路ヲ破壊シタ場合ニハ、去腦動物ノ頸ハ重力ニヨツテ垂レ、前肢ハ硬直性伸展ノ代リニ硬直性屈曲ヲ保ツ。(三)更ニ動物ヲ去腦スルニ當ツテ、筋緊張ノ分佈ガ正常デアツテ、歩行シ得ル様ニシタ場合、後頭骨ガ下方ニ位スル様ニ頭ヲ迴轉スルト、動物ハ直チニ伸展性去腦硬直ニ陥ル。之等三種ノ實驗ノ結果ヲ根據トシテ、伸張反射ハ持續性筋緊張ノ原因ヲナシ、迷路及ビ其他ノ影響ニヨツテ支配ヲ受ケルコトハ事實ダガ、迷路性ノ筋緊張反射ハ伸張性反射ト同種同量ノ緊張ヲ作り得ルト云ヘル。又、或場合ニ於テハ伸張反射ハ去腦硬直ヲ起シ得ズ、迷路性反射ヲ合併スル事ニ依ツテ初メテ硬直ガ起ル。即チ、種々ノ緊張性反射ハ去腦硬直ヲ起シ得ルモノデ、緊張ガ伸展筋ニ分佈サレルカ、或ハ屈曲筋ニ分佈サレルカハ種々ノ反射器管ノ單獨的又ハ共同的作用ニ依ツテ決定サレルモノダト云ヘル。

去腦動物ノ一特異性ハ伸長反應ト短縮反應ノ極メテ明白ニ現レル事デアル。去腦動物ノ後肢ヲ暴力的ニ屈曲シヨウトスレバ可ナリ強イ抵抗ヲ感ズル。併シ持續的ニ壓力ヲ加ヘテ居ルト急ニ抵抗ガ消失シ膝關節ガ屈曲スル。此際壓力ヲ取除ケバ膝關節ノ角度ハ他働的ニ與ヘラレタ屈曲度ニ止マル。之即チ伸長反應デアル。カク屈曲シタ膝關節ヲ更ニ他働的ニ伸展セシムレバ、四頭股筋ハ他働的ニ與ヘラレタ短縮度ニ止マルデアル。之即チ短縮反應デアル。此反應ニ依ツテ四肢ハ可塑性——「プラスチック」ニナル。軀幹乃至四肢ヲフイクシーレンスル機能ハ此反應ニアルモノトサレテ居ル。シエリントン一派ハ此二ツノ反應ハ共ニ反射性デアツテ、伸長反應ハ反射性抑制短縮反應ハ伸長反射ト目シテ居ル。

ランゲラアンノ學說ニ從フハンタア、ロイル等ノ主張スル筋緊張

ノ二重支配說即チ、「プラスチックエトオヌス」ハ交感神經ニヨツテ維持サルト云フ說ハ實驗の後援ガ充分デナイ。

ランソン教授ハ去腦硬直ノ可塑性特質ガ脊髓後根切斷ニヨツテ消失スルト主張シ、ツルツエツイスキイ、フランク等ノ說デアル所ノ可塑性緊張ガ後根ヲ遠心性ニ傳達サレルト云フ意見ニ賛成シテ居ル。之ニ對シテスピゲルハ後根ヲ切斷シテモ、迷路性ノ緊張反射ハ消失シナイ故ニ「トオヌス」ガ後根ヲ通ルト云フ說ハ疑ハシイト云ツテ居ル。之ニ對スルランソンノ反駁ハ後根切斷ノ爲メニ迷路性緊張反射ノ持續性が變ラナイ事ヲ證明シナイ限リスピゲルノ異論ハ無効デアルト云ツテ居ルガ著者等ノ實驗デハランソンノ反駁ヲ沈黙セシメ得ルト信ズル。併シ乍ラ、純然タル脊髓反射ノ場合ニ限リ、緊張性遠心路ガ後根ニ存在スルト云フランソンノ意見ハ支持サレルカモ知レヌ。

上述ノ如ク、現今ノ學者間ノ意見ハ去腦硬直ノ可塑性ハ迷路神經ノ後根タル前庭神經ノ「インテグリテート」ヲ必要トシ、緊張筋ノ深在性刺激ニ由ツテ起ル持續性反射ノ產物ダトモ云ヘルドロウシ、又脊髓後根ヲ遠心性ニ傳達セラレル特殊緊張性刺激ニ由ルモノトモ見ラレル。

著者ノ意見トシテハ、普通ノ去腦硬直ニ於テ脊髓性緊張刺激ガ後根ヲ通過シテ筋肉ニ到ルカ否カハ暫ク之ヲ問ハズトシテモ、迷路性去腦硬直ガ脊髓後根切斷ニヨツテ何等ノ影響ヲモ受ケナイ事ハ明カデアル。最近著者等ノ發表シタ實驗デハ去腦動物ニ於テ迷路性緊張反射ヲ先ヅ惹起シテ置イテ、筋肉ヲ伸長サシタ場合ニハ他働力ヲ取除ケテモ尚ホ該筋肉ノ伸長ハ止ラズ繼續的ニ伸ビテ行ク。併シ、豫

メ筋肉ヲ伸長シ、伸長ノ「マキシムム」ニ達シタトキ迷路ヲ刺戟スレバ、他働的伸長ヲ止メルト同時ニ、筋肉ハ直チニ短縮スル。更ラ一又、豫メ筋肉ヲ他働的ニ伸長シ、迷路刺戟ヲナシ、同時ニ更ニ他働的ニ伸長シタ場合ニハ、筋肉ハ最早短縮セズシテ繼續的ニ伸ビテ行ク。此事實ハ必ラズシモ筋收縮力ノ減少ニ由來スルトハ思ハレズ、又抑制作用ニ依ルトモ思ハレナイ。若シ抑制作用ノ結果トスレバ、伸長度ハ他働的ニ伸長サレタ程度デ止マラネバナラヌ。

著者ハ如斯伸張及短縮反應ノ變化ハ迷路刺戟ガ或特殊ノ變化ヲ筋肉内ニ起ス爲デアツテ、此現象ガ反射ノ理論ニ該當シナイノヲ見レバ、或ハ迷路刺戟ナルモノガ、物理學的乃至化學的變化ヲ筋肉ニ與ヘタノデアロウ。ツマリ、神經生理學ハ今後物理學及化學ト相協力シテ研究シナケレバ、筋緊張ノ根本ハ判明シナイダロウト結ンデ居ル。(淺海)

外科手術ニ於ケル一麻醉法

Eine Methode von Narkose bei der chirurgischen Operation

Von Prof. Dax und Dr. Weigand.

Münchener Medizinische Wochenschrift 6 April

1928.

藥品(メルク會社)

第一「アムブラ。」 10.011 「オイコダール」 10.0005 「スコボラミン」 10.0115 「エフエドリン」。
第二「アムブラ。」 1% 「オイコダール。」 10.0003 「スコボラミン」 10.0115 「エフエドリン」。

第三「アムブラ。」 0.01 「オイコダール」 10.0005 「スコボラミン」 10.0115 「エフエドリン」。

「オイコダール」ハ鎮痛催眠兩作用アリ且「モルフィウム」ヨリ呼吸中樞ニ働ク事が少イ。

使用藥量

手術三時間前ニ 0.5 「ベロナール」ヲ與ヘ、術前一時間半ニ第一「アムブラ」手術四十五分前、第二「アムブラ」ノ「スコボラミン」量 10.0005 トセルモノヲ與フ。

多クハ此ノ藥量ト間隔トニヨツテ與ヘテ手術ニ都合ノヨイ麻醉ノ深サニ達シウル。衰弱シタ長期ノ患者コトニ婦人ヤ老人デハ一時間半後ニハ熟睡ニ入りウ。「ヘルニヤ」ノ如ク若クテ強壯ナ患者ニハ此ノ分量デハ不足デ第三「アムブラ」ヲ與ヘバナラヌ。

作用

衰弱者、老人ハ第一回注射丈デ睡ルガ呼起スカ「ピンセット」デ挾ムト反應スル、併シ第二回注射ニヨツテ熟睡ス。始メハ「モルフィン」ノ搔痒感刺戟デ顔ヲ擦ツタリ、手足ヲ動カシタリスルガ遂ニハ靜ナ呼吸ヲナシ、顔ハ赤ラミ、瞳孔ハ擴大シテキル。「ピンセット」デ顔ノ皮膚ヲ挾ムモ反應ナク半バ口ヲ開イテ嘔シテキル。カ、ル狀態デ何等ノ障害ナク手術ヲ行ヒウルガ、尙昏睡狀態トナラズ皮膚ヲ挾ムモ反應スル時ハ第三回注射ヲナス。

不利益ナ點

一、投藥手段。一度注射シタ藥品ハ取出シエズ、而モソノ反對作用ヲ有スル藥品ハ更ニ有害ナルモノナリ。併シ注射サレタルモノハ何等ノ害モナク、「エーテル」麻醉デ危險トシラレル患者ニ大量ヲ

與フルモ無害ナル事ヲ經驗シタ。即三例ニ「オイコダール」〇、〇六「スコボラミン」〇、〇〇二五ヲ與ヘテ、中毒症狀ヲミナカツタ。アダカモ「オイコダール」ト「スコボラミン」トハ互ニソノ缺點トスル作用ヲ消シアヒ、「エフエデリン」ノ附加ニヨツテ呼吸中樞ニ及ボス「スコボラミン」ノ作用ヲ分解スルカノ如ク見エル。

二、長イ準備時間ヲ要スル事。

三、効力不確實ノ事。少量ノ「エーテル」追加ノ要ニ迫ラレタ例ガ百例中十六例アツタ。併シ第三回注射ニヨリ此ノ缺點ハ補ヒウ。

四、皮膚切開ノ際多少他ノ麻酔ニヨルヨリモ出血量大ナリ。

利益ナ點

一、手術前又ハ麻酔前ノ恐怖ヲ知ラズシテ睡ニ入り、手術ヲ受ケタ時ヲ知ラヌ事。

二、覺醒ニハ障害ナク嘔吐スル様ナ事ナシ、呼吸系患者ニモ必配ナク用ヒウル事。

三、徐々ニ覺醒スル點。舌ガ落込ム様ナ事ハナク從ツテ呼吸ニ障害ナキ爲安ニ術後尙平均三時間睡リ續ケル爲ニ最初ノ傷ノ痛ヲ知ル事ナク過ギル。

四、顔面ノ手術ヲ昏睡麻酔中ニ行ヒウル事ハ「エーテル」麻酔ニ比シ大ナル利便ナリ。

熟睡時間

熟睡時間ハ普通注射量ト平行スル兩者共個人ニヨリ非常ナ差ガアリ若クテ強壯ナルモノハ一二時間デ醒メ老人ハ五―六時間睡ル。

(五郎川)

胃腸吻合術後ニ於ケル急性「マーゲンイレウス」ノ療法ニ就テ

Zur Behandlung des postoperativen acuten Magenileus nach Gastrectomie
von Dr. H. Kahczek

Brun's Beiträge zur klinischen Chirurgie 143 Band,
Heft 4.

吾々ガ一般ニ急性「マーゲンイレウス」ト稱シテ居ル疾患ニ就テハ以前カラ色々ト論争ハアルガ今日デモ尙恐ルベキ症狀ヲ來シツ、アル。

倭此ノ急性「マーゲンイレウス」ノ療法トシテハ、一般ニ先ヅ規則的ノ胃洗ヲ行ツテ見ル、之レデ尙ウマク行カナカツタ場合ニハ、經驗アル醫師ニヨリ細心ノ注意ノ下ニ手術ノ可否ヲ決スベキデアル。偕手術ト決定シタ場合多クハ新タニ胃腸吻合ヲ作ルトカ又ハ膨レタ腸ノ輸入脚ト萎縮シタ腸ノ輸出脚トノ間ニ更ニ吻合ヲ作ルカシタノデアルガ、著者ハ下記ノ法ニヨリ好結果ヲ得タノデアル、即此處ニ其ノ例ヲ述ベルト。

患者ハ五十七才ノ男數年前ヨリ胃ガ惡ク食後時々上腹部ニ壓迫感ガアリ前年ノ七月以來此ノ壓迫感ハ高マリ時々嘔氣ヲ催スニ至リ秋ヨリハ嘔吐サヘ加ハリ十二月以來此ノ症狀更ニ進行シテ患者ハ流動食シカトレナクナリ、強ク瘠セ衰ヘテ來タ爲ニ遂ニ著者ヲ訪フ一ツタノデアル。

當時患者ハ衰弱甚ダシク瘠セ臨床的ニ相當胃ノ擴張シテオルヲ認メタガ、之レ以外胃ニハ異狀ヲ認メル事ガ出來ナカツタ。翌日試

驗のニ開腹術ヲ行ツテ見ルト胃ハ可成擴張シ、幽門部ニ強キ癢痕狹窄ガアツタ、爲ニ結腸後胃後壁胃腸吻合ヲ行ツテ手術ヲ終ル、其後四日目ニハ尙體温三十八度ニ昇リ相當強キ氣管枝炎ヲ起シテ居ツタガ五日目ヨリ發熱ナク九日目迄ハ次第二快方ニ向ツタノデアル。然ルニ九日目ノ夕方ヨリ突然嘔吐ヲ始メ急性「マーゲンイレウス」ノ症狀ヲ現シテ來タノデアル。

胃洗、側位又ハ注意深ク「マッサージ」ヲ行ツタリ「アトロピン」注射ナド手ヲ盡シテ見タガ更ニ其ノ効ナシ、爲ニ患者ノ一般狀態ヨリシテ手術ノ危險ハアツタガ翌日即チ術後十日目再手術ヲ決行シタ、手術所見トシテハ腹膜ニハ異狀ナク胃ハ強ク擴張シ十日前ニ行ツタ吻合部サヘモ見ニクイ、依ツテ胃ノ前壁ニ「ヴィツエル」ノ胃瘻ヲ作り瘻孔ヨリ長キ「ゴム」管ヲ胃中ニ挿入シ、其ノ先端ヲ胃腸吻合門ヲ通シテ空腸ノ輸出脚ノ中迄入レ手術ヲ終ル。

以後ノ療法トシテハ瘻孔ヨリ出來ルダケ多量ノ榮養ヲ送り傍ラ胃洗及ビ胃ノ内容ヲ取出ス事ニヨリ胃ノ負擔ヲ少ナカラシメン事ニ努メタノデアル。(初メ二日間ハ一日二回次ノ八日間ハ一日一回胃洗) 其後患者ハ次第二快方ニ趣キ、十二日目ニハ床ヲ離レル事が出來タ、二週間後口ヨリ少量ノカユヲ與ヘ、其後二週間ハ尙此ノ瘻管カラ流動食ヲ與ヘ、五週目ニ至ツテ瘻管ヲ抜キ取り其ノアト傷モ間モナク治癒シ、以來體重モ増加シ今日尙健全ニ暮シテ居ル。

諸テ本法ニヨリマスト新タニ胃腸吻合ヲ作ルトカ腸吻合ヲ作ルヨリモ操作ガ非常ニ簡單デアル、又本法ニヨレバ「マーゲンイレウス」ノ症狀ガ無クナルト否トハ關係ナク、非常ニ飢餓ノ狀ニアル、患者ノ榮養ヲヨクスル事が出來ル尙又相當薄キ護謄管ヲ挿入シテモ之

レニヨツテ萎縮シ壓迫サレタ腸ノ輸出脚ヲバ幾分トモ擴ゲル事が出來ルノミナラズ胃腸壁ト護謄管トノ間ニハ多少ノ間隙ガ出來ル、此ノ間隙ヨリ胃中ニタマツタ内容ガ腸ニ流出スル事モ出來、爲ニ胃ノ擴張セルニ對シテモ有効ニ働クノデアル。

護謄管ノ胃腔内ニアル部分ニ小孔ヲ作ツテ胃ノ内容ガ腸ニ行キ易イ様ニシテハ如何カトノ考ヘモ起ルガ、斯様ニシテハ流動物ヲ注入スル際ニ胃中ニ流れ出デ榮養モ失ハレ、又胃ノ擴張ヲモ増スト云フ缺點ガアル、然シ流動物ヲ注入ノ際ノミ瘻管ノ中ニ二重ニ更ニ小管ヲ入レ、之レヨリ食ヲ腸内ニ送り込ム様ニスレバ更ニ好果ヲ齎スデアラウ。

著者ハ本法ニヨリ患者ノ生命ヲトリトメ極メテ好結果ヲ得タ爲ニ此處ニ記シテ諸家ニ御勸メスル次第デアル。(福岡)

結腸間膜間隙内ニ嵌頓セル胃及小腸ニヨツテ

起ル吐糞症ノ一例

Ein Fall von Ileus bei innerer Einklemmung des Magens und Dünndarms in einer Mesokolonlücke.

von Dr. M. Kagan.

Zentralblatt für Chirurgie: Nr. 32 Sonnabend, den 11.

August. 1908 S. 1995

結腸間膜間隙内ノ嵌頓ハ誠ニ稀ナモノデアル、一九二〇年ヘーデルシユミット氏ハ僅カ八十三例ノ腸間膜間隙ヲ舉ゲテキル。コノ内結腸間膜間隙ニ三十二例デアツテ、問題トナルハ横行結腸デアル、結腸間膜間隙内嵌頓ガ非常ニ稀ナル事ハコノ三十二例中一例ノミデ

アル事ヲ述ブレバ充分デアル。私ハ此ニ遭遇セシ一例ヲ報告スル。六十四才ノ農夫、病歴、輕イ晝食後上腹部ニ激烈ナル疼痛表レ、ソ

ノ痛ハ速ニ全腹部ニ廣ガリ腸ノ脹滿ヲ伴ヒ、醫藥ニヨリテハ瓦斯モ便モ出ス事ハ出來ナカッタ。患者ハ彼ハ既ニカ、ル發作ヲ數回起シタ事ヲ申立テタガ、此時ハ醫師ノ助ナクシテ經過シタ。現在症、顔面蒼白、呼吸亢進脈搏ハ百二十カラ百三十微弱、腹壁ノ觸診ハ非常ニ疼痛ヲ感ジ、腸ノ脹滿ノタメ腹部臟器ハ觸レル事ハ出來ヌ。胃洗滌一ヨリテ凡ソ二百五十瓦ノ黃色ニ濁濁セル液ヲ得、注腸ニヨリテ瓦斯モ便モ出ス事ハ出來ナカッタ同日「エーテルクロホルム」麻醉ノ元ニ手術ヲナス、即臍ノ上部五「センチメートル」ノ部ヨリ恥骨ニ至ル切開ヲ加ヘ、腹ヲ開クニ腹壁ニハ凡ソ三百瓦ノ黃色濁濁ノ液體ガアリ、脹滿セル腸ノ凝塊ガアツタ横行結腸ヲ大網ト共ニ少シ左ニ引バツテ小腸ノ凝塊及十二指腸腔腸皺襞ヨリ離ス事ニ成功シタ、コノ大網ハ多少「チアノーゼ」ヲ呈シ、横行結腸ノ漿液膜ニハ鬱血ノアル他血斑ヲ認メタ、横行結腸ヲ上ニ上ゲルト結腸間膜間隙ガ表ル、六糎ト八糎位ノ橢圓形ヲ呈シ、ソノ内ニ胃ノ後壁ト小腸ノ塊ガ突入セリ、小腸ヲ引出シタル後見ルニ間隙ノ端ハ、残りノ結腸間膜ト少シモ異ナレル所ナク胃モ著シク脹滿シテキル他病理的變化ナク脹滿セル小腸ハ直チニ通常ノ位置ヲトレリ、此ニ於テ腹ヲ閉ヅ注腸ニヨリ既ニソノ日一瓦斯ハ出デ手術後二日ニシテ自然ニ便通モアツタ、手術後ノ經過ハ順當デ「プリメーレハイリング」ヲナセリ。

コノ例ニ於ケル結腸間隙ノ原因ハ何ナリヤト云フソレハ先天性ノ缺如ニ由ルモノト信ズ、上述セルガ如ク間隙ノ端ニ何ヲ病的ノ變化ノナキ事及嵌頓ガ何度モ繰返サレタト云フ事ハ此ノ事實ヲ物語ツ

テキル、嵌頓ノ出發點ハ恐ラク脹滿セル胃デアツタノデアラウ。

(赤木)

腎及ヒ輸尿管結石ノ排除ニ就テ

Zur Austreibung von Nieren und Harnleitersteinen.

Von H. Kehl und O. Thomann.

Zentralblatt für Chirurgie Nr. 19, 1928, S. 1165.

一九二六年 Kalk 及ビ Schöndube ハ腎結石ニ對スル「ヒポフイジン」療法ヲ報告シテ曰ク、「腎石患者ニ「ヒポフイジン」ヲ注射スルニ二〇—三〇分後ニハ尿路特ニ輸尿管ハ強度ニ收縮シテ結石ヲ下方ニ驅逐シ以テ結石排除ヲ來タス」ト。爾來數氏ノ追試ニヨルモ、余等ノ經驗ニヨルモ「ヒポフイジン」ハ輸尿管結石排除ニ對シテ左程確實ナル効果ナカリキ。茲ニ於テ余等ハ Leven ノ方法ニ從ヒ、第十二胸髓及ビ第一腰髓部ノ麻醉法即チ脊柱外側斷節麻醉法 (Paravertebrale Segmentausschaltung von Ditz und Li der behielten Körperseite) ヲ行ヒタリ。之ノ麻醉法(二%)「ノボカインズブラレニン」溶液五—一〇㏄ヲ用ヒテ) ヲ行フ時ハ結石ガ腎盂ニアルヤ或ハ輸尿管ニアルヤヲ問ハズ疼痛ハ消散シ、不安嘔吐筋緊張等ハ除カル。余等ハ之ノ方法ニヨリ八名ノ患者ヲ治療セリ。

一、中四例ニ於テハ速刻ニ而カモ持續的ニ無痛トナリ、其中三例ハ輸尿管口ニ結石ヲ發見シ、直腸ヨリ指ヲ以テ双合のニ之ヲ膀胱内ニ取り出シ得タリ。

二、他ノ四例ニ於テモ亦奏効ノ見ルベキモノアリ。第一例、注射後三時間ハ全然無痛トナリシモ其後再ビ徐々ニ疼痛ヲ覺エタリ、之

ノ疼痛モ排尿ガ正常ニ復スルト共ニ全ク去レリ。

第二例、注射後疼痛ハ殆ンド去リタレドモ間モナク再ビ下方ニ疼痛ヲ覺エタリ、依ツテ更ニI3ノ麻醉ニヨリ疼痛ハ全ク去リ患側ノ輸尿管ハ腎盂マデ容易ニ「ソンドン」ヲ挿入スルコトヲ得タリ。

第三例、疼痛著シク減退シテ他ノ鎮痛劑ヲ併用セザルニ至レリ。

第四例、數度ノ注射ガ毎常只一時間(一二三時間)疼痛輕減ヲ來タセシニ過ギザリキ。依ツテ手術的一輸尿管結石ヲ剔出セリ。

又 Kalk 及 Schöndube ハ「セボフィン」注射ハ腎石ト「イレウス」トノ鑑別診斷ニ役立つ言ヘリ。即チ注射ニヨル「コーリツク」發作ハ腎石ナルコトヲ示シ、數日後ニハ結石ハ尿ト共ニ排出セラルベシ。

然レドモ痙攣發作ハ「ヒポフィン」ガ腹腔空腔器官ノ平滑筋ノ收縮ヲ促スタメナルガ故ニ、若シ痙攣ノミニツテ結石ノ排出ナキ時ハ「イレウス」トノ鑑別ニハナラザルナリ。余等ハ「イレウス」症狀ヲ呈セル腎石患者ニ就テ脊柱外側麻醉法ガソノ鑑別ニ役立つ且ツ治療的著効ヲ奏シタル一例ヲ經驗セリ。主治醫ハ「イレウス」ト診斷シテ患者ヲ送り來タリ、多量ノ「モヒ」モ何等奏効セズトテ開腹ヲ主張セリ。患者ハ苦悶烈シクタメニ靜カニ診察シ得ザリシ程ナリキ。之ノ「イレウス」症狀ガ腎石ニ起因セルモノナルヤ否ヤヲ決定センガタメニ直チニD12及ビL1ノ麻醉ヲ特ニ疼痛強クシテ患側ト思ハル、體側ニ行ヘリ。然ル處速刻全然無痛トナリ、凡テノ「イレウス」症狀ハ消散シ、翌日結石ガ尿ト共ニ排出サレ來タレリ。

以上ノ如ク Kalk 及ビ Schöndube ハ輸尿管ヲ收縮セシメ疼痛ヲ増大セシムルガ如キ藥劑ヲ應用セシモ、余等ハ疼痛ヲ除キ「スパス

ムス」ヲ解ク方法ヲ行ヒタリ、而シテ何レノ場合ニ於テモ疼痛消散乃至減退ヲ來タセル外ニ九例中四例ニ於テハ痙攣ノ原因タル結石ヲ排除スルコトヲ得タリ。(鹿岡)

腹膜炎時ノ腹腔ヨリスル吸收ニツイテ

Zur Frage der Resorption aus der Bauchhöhle bei der Peritonitis,
von Georg Magnus.

Deutsche Zeitschrift für Chirurgie 210. Band. 5/6. H. 1.
307

腹膜カラノ吸收ノ中、水ニ可溶性物質ハ血管ニヨツテ吸收サレルノカ、淋巴系ニヨツテ吸收サレルノカ、此ヲシラベルタメ一先ズ動物ノ腹腔内ヘ墨汁ヲ注入スルト、二三時間ノ後ニハ其ノ微粒子ハ吸收サレテ腹膜ノ淋巴管ヲ滿シテ、其ノ形ヲ明瞭ニ示シマス。(墨粉ノヤウナ水ニ不溶性物質ノ吸收ハ淋巴系デサレル事ハ Recklinghausen 氏ニヨリスデニ明ニサレテキル)、ソノ腹膜上ニ過酸化水素ヲ滴下スルト、今マデ墨デ滿サレテキタ淋巴腔ハ更ニ氣體デミタサレテ強ク擴ガル。此事ハ水ニ可溶性物質デアル過酸化水素ガ不溶性物質デアル墨ノ粉末ト同ジク淋巴腔ニ入り、ソコデ墨粉ノ接觸作用ニヨツテ酸素ヲ分離シ淋巴管ヲ擴ゲルノデアル事ハ明デアル。

前ノ實驗デ淋巴管内デ過酸化水素カラ出來タ酸素ノ泡ガ視野ノ或一定シタ場所デ刻ヲナシテ次カラ次ヘト外ヘ出テ來ルヲ見ル事ガアル。此ノ事ハ淋巴管ト腹腔トノ間ニ吸收ノタメノ立派ナ一定シタ門スナハチ孔口ナルモノデアル事ヲ證明シテキル。

コノ方法デ腹膜炎ノ時ノ吸收能力ノ時間的關係ヲシラベルト、腹

膜傳染後四時間目マデハ平常通りデ、五時間目カラ吸收能力ガ上昇シ始メ、七乃至十時間目デ最高ニ達シ、ソレカラ下リ始メテ二十四時間後ニハホトンド常態トナル。

又此法デ腹膜吸收力ノ局所的差異ヲシラベルト、横隔膜、ソノ中心デモ臍様中心ガ最モ吸收力ノ盛ナ所デ、ソノ次ハ腹膜ノ體壁葉デア。腹膜ノ内臓葉ハ健全ナ時ハ吸收作用ヲシナイガ、急性炎症デ體壁葉ノ吸收作用ガ盛ナ時ニハ、内臓葉モ亦吸收ニアズカルモノデア。 (淺井)

嵌頓脱腸ノ誤診

Zur Fehldiagnose der eingeklemmten Leistenhernie

von Prof Dr. H. Eggers,

Zentralblatt für Chirurgie 55 Jahrgang Nr 34 Sonabend,

den 25. August 1928. S. 2134.

患者ハ重イ物ヲ持上ゲタ時ニ突然左鼠蹊部ニ疼痛ヲ訴ヘ、ソノ部分ニ腫脹ヲ起シテ熱發シタ三十二才ノ男子デアリマス。

彼ハ未ダ曾テ脱腸ヲ知ラズ、ソノ時ニ嘔吐ハ起シマセンデシタ。彼ハ嵌頓脱腸ノ診斷ノモトニ直チニ外科ノ病院ニ送ラレマシタ。

所見。蒼白、脈搏小、頻數、左外鼠蹊部ニ半球形ノ僅カニ移動スル胡桃大ノ腫脹アリ、壓迫スレバ非常ニ疼痛アリ大キサハ減ジマセンデシタガコノ腫脹ノ外側ニ輸精管ヲ觸レマシタ。

診斷。嘔吐ヲスル爲ニ多分内容ニハ大網ヲ有スル嵌頓セル直接ヘルニヤ。

手術ヲ致シマスニ脱腸ハ見當ラズシテ輸精管ヲ外側ニオシヤツタ

輸精管血管束カラノ血腫デアリマシタ。

第二例ノ患者ハ手術前ニハ、正確ナル診斷ガ定メラレマセンデシタ。コノ患者ハ非常ニ肥滿シタ肉屋ノ主人デアリマシテ、既ニ長イ前カラ左鼠蹊脱腸ヲ患ツテキマス、六十五才ノ男子デ常ニ自分デ納メテキマシタ。患者ハ脱腸帶ヲ用ヒテキマシタ。一年前ニ數日間鼠蹊脱腸ノ爲ニ激シイ腫脹ヲ來シ、爲ニ便秘ヲ來シタノデ熱イ腰湯ヲシテ再ビ腸ノ機能ガ回復シテ脱腸ガ納メラレタコトガアリマス。病院ニ入院スル日ノ朝幾分激シイ脱腸ガアリ、完全ニ納メラレナイデ脱腸帶ヲシテ仕事場ニ行キ仕事ヲシテキマシタ。午後二時頃突然非常ニ激シイ疼痛ガ起リ、虚脱ニ落入リ家ニ運バレテ來マシタ。便意ヲ催スニ拘ラズ排便ハナク、腹部ノ腫脹惡心ハアリマシタガ嘔吐ハアリマセンデシタ。ソノ脱腸腫ハ周圍ニ擴ガリ時間ノ經過ト共ニ非常ニ疼痛ガ増シテ來マシタ。

午後六時ニ入院シマシタ時ハ患者ノ顔ハ蒼白デ、脈搏ハ正調、緊度ハ尋常デシタガ一分間一二〇打チ、體温ハ三八・四度、左側ノ陰囊ハ大人ノ拳ノ二倍大アリ、非常ニ堅ク、張力アル堅サデ壓迫スルト非常ニ疼痛アリ、脱腸ノ根部ハ明カニ觸レマスガ非常ニ僅カシカフクレテキマセンデシタ。ソシテ非常ニ僅カノ壓痛ガアリマシタ。脱腸腫ヲ壓迫シテ縮少スルカ否カラ見ル詳細ナル検査ハ、非常ニ疼痛アルコト、尙引續キ熱發セル爲ニ直チニ中止シマシタ。脱腸ノ内容ノ種類ヲ觸診デ定メルコトモ疼痛ノ爲ニ出來マセンデシタ。

私ハ嵌頓脱腸カ、急性炎症性水腫ノ診斷ヲ下シマシタ。最後ノ診斷ヲツケタ理ハ緊張セル平等ノ膨脹ト脱腸腫ガ鼠蹊輪ト明ラカ一境サレ、脱腸ノ根元ニハ全ク疼痛ガナイ爲デアリ、尙熱發セルコトハ

急性炎症ヲ考ヘシメマシタ。

腰椎麻痺デ行ツタ手術デ脱腸囊ヲ閉キマス、薄イ溷濁セル膿様ノ滲出液ヲ認メ、脱腸ノ内容ハ誘導脱腸トシテ、大腸ノ下降部ノ下部ガ出テキマシタ。即殆ンド總テノS字狀部デシタ。膿ハ脱腸囊ノ下面ノ腸環ノ下ニ入ツテキマシタ。新シク膠着シタ環囊ヲ解イタ後脱腸囊ノ後壁デ林檎大ニ肥大シタ浮腫様ノ大腸網膜下垂體ト濃厚ナル強ク大腸菌ノ匂ノスル膿ヲモツタ胡桃大ノ膿瘍ヲ見付ケマシタ。ソノ他ノ脱腸囊ハ到ル處腸ノ漿液膜ノ様ニ平滑デ光澤アリ、脱腸門

雜 錄

京大 府大 外科雜誌抄讀會

九月二十七日(木)午後七時 於樂友會館

演 題

- 一、手術後ノ血液變化ニ就テ 鷺 尾 君
- 二、腎及輸尿管結石ノ排除ニ就テ 鹿 岡 君
- 三、笹頓「ヘルニア」ノ誤診ニ就テ 福 富 君
- 四、胃腸吻合手術後ニ於ケル急性「マーゲンイレウス」ノ療法 福 間 君
- 五、結腸間膜間隙ニ笹頓セル胃及小腸ニ依リテ起ル吐糞症ノ一例 赤 木 君

一三六四 (第六號 一八〇)

ハ五十錢銀貨大デソコニハ癒着モ新シイ膠着モアリマセンデシタ。大腸網膜下垂體ヲ取ツテ見マストコノ膿瘍ハコレカラ出タコトヲ示シマス。

大腸菌ニヨリ起ツタ脱腸囊内ノ大腸網膜下垂體ノ急性炎症ハ稀ナルコトデアル。コノ炎症ヲ起シタ原因ハ大腸内カラ出タ細菌デ起シタト云フ想像ヲ下スコトガ出來マス。即脱腸囊ニヨル壓迫ト共ニ脱腸ノ内容ガ不完全ニ納メラレタ時組織ノ破壊ヲ起シ、急性ノ炎症ヲ起スノニ都合ノヨイ場所トナルコトガ考ヘラレマス。(福富)

- 六、外科手術ニ於ケル一麻醉法 五 郎 川 君
- 七、筋 緊 張 淺 海 君
- 八、腹膜炎時ノ腹膜吸收 淺 井 君
- 九、乳兒期ニ於ケル骨折治癒ニ就テ 鈴 江 君
- 綜 說 塚 原 講 師

第二十七回近畿外科集談會

昭和三年十月廿一日(日)午前九時大阪府立醫科大學基礎醫學部五階大講堂ニ於テ開會。天氣晴朗ニシテ來會者頗々多ク、午後五時閉會。直チニ大阪「ビルデング」ニテ懇親會